

医療保健学部の学生のみなさんへ

「平成 27 年度医療保健学部授業評価アンケートの結果について」

つくば国際大学医療保健学部 FD 委員会 平成 28 年 8 月

平成 27 年度の「授業評価アンケート」を基に各教員の授業改善について、前年度からの工夫、その結果、さらに次年度に向けての改善策について開示し、授業改善の達成度をより明らかにすることにしました。学生の授業評価結果を前期・後期別、講義科目・実験実習科目別に記述します。

I. 学部の総評と学科別の次年度に向けての改善等

<医療保健学部>

1. 学生の取り組み

「1: 遅刻や欠席をせずに出席できましたか」、「2: 積極的に授業に参加しましたか」、「3: 授業中に私語を慎んでいましたか」は、前期の講義科目 4.39~4.71・実験実習科目 4.14~4.73、後期の講義科目 4.34~4.60・実験実習科目 4.07~4.64 で、高い評価値であった。

「4: 事前にシラバスを読み、授業に臨みましたか」は、前期の講義科目 3.28・実験実習科目 3.41 で、いずれも平成 26 年度を上回っていた。「5: オフィスアワーを活用しましたか」は、前期の講義科目 2.33・実験実習科目 2.61、後期の講義科目 2.41・実験実習科目 2.57 であった。平成 26 年度と比べると実験実習科目では前期・後期に関わらずオフィスアワーの活用は多くなっていた。講義科目では前期・後期に関わらず少なくなっていた。「6: この科目の自己学習時間は、1 週間に平均何時間でしたか」は、前期の講義科目 2.20 時間・実験実習科目 2.54 時間、後期の講義科目 2.21 時間・実験実習科目 2.50 時間であった。実験・実習科目の方が、自己学習時間が多かった。自己学習時間について平成 26 年度と比べると、前期では実験実習科目の方が長く、後期では講義科目の方が長い自己学習時間であった。学科による“ばらつき”がみられた。「7: 総合的にみて、あなたの学習への取り組みに満足していますか」は前期の講義科目 3.66・実験実習科目 3.75、後期の講義科目 3.66・実験実習科目 3.82 で実験実習科目の満足度が高かった。

2. 教員の授業展開

13 項目の学部平均値について、前期は講義科目 3.82~4.29・実験実習科目 4.01~4.38 であった。後期は講義科目 3.88~4.27・実験実習科目 4.01~4.38 であった。

前期・後期ともに「8: 教員は授業の時間外でも学習相談に乗ってくれましたか」以外は全て学部平均値が 4.0 以上の評価値であった。

<理学療法学科>

1. 前年度からの工夫事項

動画を多用し、イメージしやすいように授業工夫していた。

スライドと教科書を連動させてノートを取るようにしたり、国家試験に通じる教科書を用いて授業展開を行っていた。

また、レポート返却だけでなく、直接指導など積極的に用いる工夫も多かった。

小テストや授業途中での確認テストや基礎科目の復習など、継続的な学習の促進や理解の状況を確認しながらの授業の工夫も多く見られた。さらに演習だけでなく、講義においても臨床場面を積極的に活用する工夫が見られた。

教員の取り組みに関しては、デモンストレーション・実技・体験を多く取り入れたり、小グループに分け、グループごとに教員1名がつく実習形態にするなど授業工夫をしていた。

初回到教科書の活用方法(予習)として、「わかる」と「わからない」を区別することを意識してマーキングすることを説明したり、演習課題の振り返りとまとめを行う時間を設けるなど学習指導が行われていた。

また、実験レポートをマニュアル化(書き込み式)して、レポート作成時間の軽減を図っていた。

2. 本年度のアンケート結果

1) 講義科目(前・後期)

学生の取り組みでは、「私語を慎んでいたか」「シラバスの確認」「満足度」「オフィスアワーの活用」の項目で学部平均よりも低値であった。

例年、オフィスアワーの活用の時間と自己学習の時間が低い傾向である。科目によっては、小テストを導入したことにより、時間外の学習が増加し改善していた。

教員の授業展開では、「成績評価の説明」「授業の理解度の把握」「シラバスに準じた講義」「時間外での学習相談」において、学部平均よりも低値であった。

2) 演習・実習科目(前・後期)

学生の取り組みでは、「自己学習の取り組み時間」のみ以外、学部平均よりも高値であった。教員の授業展開では、すべての項目において学部平均よりも高値であった。

症例報告会を実施し、教員と学生、学生同士による相互討論した科目や課題基盤型学習を取り入れ、グループでの競争形式での学習を行った科目などの授業工夫によると思われる。

3. 次年度に向けた改善策

アンケート結果に基づいて、具体的に改善策が挙げられていた。全体的には、学習内容の希薄を避けながら、学生の学習負担を軽減する工夫が多くみられる。また、国家試験の内容を損なわない工夫もみられる。

授業準備や授業体制については、「小テストを活用して自己学習の時間を確保する」「事前学習を徹底してくるよう学生に指導する」「授業前後のスタッフ間の連携を密にする」「学生が興味を持ちやすいと思われる視聴覚教材を収集し活用する」「アクティブラーニングをどう授業の中で展開し、評価していくかについてわかりやすい方法で周知していく」などの取り組みが挙げられた。

教員の取り組みについては、「授業の終わりに教員から質問して理解度を測る」「学習に関して教員に相談することを促し、自己学習の取り組みを高める」「学生の質問に対して回答のまとめを配布する」「科目と臨床実習との結びつきを丁寧に説明することで、学習

の必要性の理解を促し、自己学習の時間の増加と授業内容の理解に結び付ける」などの取り組みが挙げられた。

<看護学科>

1. 前年度からの工夫事項

授業の教材として、教科書をはじめ、教員作成資料、パワーポイントやDVDなどの視聴覚教材を活用して興味や関心を持たせる、理解を促す工夫がされていた。また、新聞記事を読んで自分の意見をまとめるなど、身近な出来事を取り上げて考えさせる工夫もされていた。

具体的には、興味や関心を持たせるための工夫として、「医療人として必要な要素に絞りテーマを設けて、新聞記事等から自分なりの意見も持って授業に参加させた」や、「身近な例や世相の出来事を用い興味を沸かせた」、「授業で到達すべき課題を指示した」、「板書して丁寧に説明した」、また「授業の途中で肩こり予防や腰痛予防のストレッチを取り入れ、リフレッシュ」を図りつつ授業に集中させる工夫なども行われていた。

講義を一方向的に行うのではなく双方向の授業とするため、「学生に質問しながら進めた」、「シンキングタイム、バズセッション、発表を通して考えを深化させた」、「リアクションペーパーを活用し講義内容の疑義や意見、感想などを記入させ、次回授業時に回答やコメントする」が多くの科目で取り入れられていた。知識の定着や理解を深めるための工夫として、「前回の授業の復習テストを実施し、解説を行うことで理解を深めた」、「講義前後・講義終了ごと・国家試験に準じた確認テストの実施」、「レポート提出による振り返り」、成績不振者に「補講と補足試験」が行われていた。学生の学習意欲の向上や学習の動機づけ、あるいは予習を促すための工夫として、「臨地実習の映像を見せ、実習場でのエピソードを紹介した」、「授業の資料を全て初回授業時に配布」が行われていた。

2. 本年度アンケートの結果

1. 教員の授業展開

教員の授業展開に関しては全項目において学内平均を上回り、すべての項目において4.5点以上であった。アンケートのコメントにおいても、「わかり易い」、「関心がもてた」、「楽しかった」などの意見があり、「学生からの質問頻度も増えた」という記述もあった。その一方で「授業展開がハード」、「引用・参考文献が難しい」、「前期と後期で時間が空いてしまい（授業）内容を忘れてしまった」などの意見も散見された。

2. 学生の取り組み

学生の取り組みに関しても全項目において学部平均を上回っていた。1週間の自己学習時間及びオフィスアワーの活用についての評価は、前期では2.73点と低かったが、後期は3.49点とアップした。前期はまだ教員との関わりに慣れず躊躇もあり低いのではないかと考えられる。また自己学習の促進のために、「予習のために資料を事前に配布する」、「振り返りのレポートを提出させる」、「新聞等で身近な出来事を読ませる」などの工夫もされている。オフィスアワーの活用改善に向けて、看護学科のすべての教員が研究室にオフィス

アワーの時間を掲示したり、アポイントを取りやすいようメールアドレスを表記したりと工夫し、学生が利用しやすい環境づくりを行っている。また、それぞれの初回ガイダンス時にオフィスアワーの活用について説明するなど学生に周知を図っている。今後も継続していき、少しでも活用度のアップに繋げたい。

3. 次年度に向けた改善策

学生の自己学習向上に向け、「過度な負担にならないような課題・レポートを課す」、「復習の大切さを指導したい」、「レディネスが十分でない学生には丁寧な指導を行う」など、学生の自己学習への意欲向上に取り組んでいきたいと示されている。一方で「自己学習を充実できる方法について検討したい」との記述もあり、一教員だけの取り組みでは限界があるのではないかと考えられるコメントも見受けられる。

教員の授業展開に関しては、現在の工夫点を踏襲しつつ、「授業内容の精選」、「可視化するように工夫する」、「参加型授業の展開を工夫する」、「小テストで到達度を確認しながら進める」、「最新の情報に触れさせながら授業を進める」、「関連科目について領域をまたいでの連携を図る」、複数の教員で担当する科目では「教員間の意思疎通を図る」、「指導方法のズレが最小となるよう綿密な打ち合わせをする」、「教員の技術の質を向上させる」など更なる工夫や改善策があげられていた。

<保健栄養学科>

1. 保健栄養学科の授業評価アンケート報告書の総評

各教員の授業評価アンケート報告書から「前年度からの工夫」、「次年度に向けた改善策」については、わかりやすい効果的な授業を実践するために教員が個別に行っている分析や創意工夫などに注目し、要点を抽出した。「結果」については本学科と学部全体、前年度との比較を行った。「前年度からの工夫」に関しては、各教員の地道な努力がうかがえ、「結果」にもその努力が反映されているようである。「次年度に向けた改善策」については様々な方策が提示されていた。特に自己学習時間を増やす方策に着目した。今後もFD委員が中心になって学科内の意見を集約し、学部FD委員会において各学科のFD活動も参考にしながら、授業参観や研修会の実施など、今後も組織的なFD活動に積極的に取り組んでいきたい。

2. 各教員の「前年度からの工夫」について

1) 授業の資料等に関して

- ・ レジュメに書き込みができるよう、スペースをあけた。
- ・ 授業で用いる資料をすべて初回の授業で配布した。
- ・ パワーポイントのデータをPDFファイルに変換し、学内のメールアドレス所持者に限定して、当該授業終了後にホームページ上に公開した。

2) 授業の展開に関して

- ・ 毎回授業開始時に小テストを実施した。

- ・ アクティブ・ラーニングを試みた。
- ・ 学生の関心と集中力を維持させることに細心の注意を払った。
- ・ グループでのプレゼンテーションを実施した。
- ・ グループワークを取り入れた音読活動を中心に据えた。
- ・ マーケティング理論を利用した販売促進のためのプレゼンテーションを行った。
- ・ 高校までに生物や化学を十分学習していない学生に、高校の教科書を復習するように指導した。
- ・ 高校で化学を履修していなかった学生にもわかるように、かなり基礎的な解説を入れた。

3) 実験・実習等に関して

- ・ 知的・精神障害者作業所でのボランティアに参加し、実体験した。
- ・ フードサービス店のストアクリニックを実施した。
- ・ 献立作成のスキルを身につけるため、ステップ式献立作成のレポートを課した。
- ・ 喫食者アンケートの結果や衛生のモニタリングなどを通して、PDCA サイクルのマネジメントを体験した。

4) シラバス、オフィスアワーに関して

- ・ 初回の講義において、講義のねらいと全 15 回の展開について一人一人から質問を受けながら説明した。
- ・ 毎日放課後（18：00～19：30）にオフィスアワーを設けて質問に対応した。
- ・ 授業初回のガイダンス時には、シラバス内容について確認を行った。

授業の資料に関して、パワーポイントのデータを PDF ファイルに変換し、授業終了後にホームページ上への公開がされており、用紙、印刷の手間、欠席者への対応等、作業の効率化、省力化の方法として非常に有用であると考えられた。

シラバスおよびオフィスアワーに関する設問の平均点は毎回低く、改善の余地が大きい項目である。シラバスに関して、初回の授業でその内容全体について確認を行うことで、授業前にシラバスを読む習慣が身につくことを期待したい。オフィスアワーについては学生の利用しやすい時間帯に設定するのは当然であるが、毎日放課後に設けるのは非常に有効であると考えられた。

3. 「学生評価結果」のまとめ

学部全体と保健栄養学科とで平均を比較したところ、前期の講義においてすべての設問で学科平均が学部平均を 0.09～0.35（平均 0.24）下回っていた。前期の実験・実習においては「設備や器具は整っていましたか」で学科平均が学部平均を 0.03 上回っていたほかはいずれの設問でも学科平均が学部平均を下回っていた（最大 0.53、平均 0.16）。同様に後期の講義ではすべての設問で学科平均が学部平均を 0.10～0.33（平均 0.24）下回り、後期の実験・実習でもすべての設問で学科平均が学部平均を 0.12～0.40（平均 0.23）下回っていた。

前年度の結果と比較したところ、前期の講義においては「遅刻や欠席をせずに出席できましたか」が前年度を0.03下回ったほか、いずれの設問においても前年度を上回っていた（最大0.33、平均0.16）。前期の実験・実習においては、「授業中に私語を慎んでいましたか」、「オフィスアワーを活用しましたか」で前年度をそれぞれ0.03、0.33下回ったほか、いずれの設問においても前年度を上回った（最大0.5、平均0.13）。後期の講義においては「遅刻や欠席をせずに出席できましたか」、「積極的に授業に参加しましたか」、「教科書や参考書は役に立ちましたか」で前年度をそれぞれ0.13、0.04、0.01下回ったほか、いずれの設問においても前年度を上回った（最大0.30、平均0.08）。同様に後期の実験・実習では「遅刻や欠席をせずに出席できましたか」、「積極的に授業に参加しましたか」、「授業中に私語を慎んでいましたか」で前年度をそれぞれ0.19、0.10、0.17下回ったほか、いずれの設問においても前年度を上回った（最大0.36、平均0.10）。

学部全体との比較で評価が低いものの、前年度と比較して大部分の設問において改善がみられた。引き続き授業展開を工夫するとともに、学生の授業の取り組みについて指導を徹底し、学部全体の平均に近づけてゆきたい。

4. 各教員の「次年度に向けた改善策」について

- ・ 講義の中で、シラバスの内容について触れてみる。
- ・ 自己学習することを強力に指導する。
- ・ 化学を全く履修していなかった学生に対して、自己学習用課題を用意する。
- ・ 宿題の量を増やす。
- ・ 次回の授業内容に関連する資料などを配布し、予め読んでこさせる。
- ・ レポート提出時に書き方のポイントや難しかったところを聞くなど、学生とのコミュニケーションを図るように努める。

シラバスおよびオフィスアワーとともに評価が低い設問に自己学習時間によるものがある。自己学習時間を増やすための方策として、自己学習用課題を用意したり、宿題の量を増やしたり、あるいは事前に配布した資料を予め読んでこさせる等、予習、復習の課題を課すことは直接的で有効な手段と考えられるが、自ら疑問点を見だし、それを解決すべく学修する習慣も身につかせたい。また、レポート提出を授業時間外で教員に直接行うことは、学生とのコミュニケーションが図られるとともに、オフィスアワーの活用につながる有効な手段と考えられた。

<診療放射線学科>

1. 学生の取り組み（分析と評価）

- 1) 遅刻欠席せず出席できたか・・・優良
- 2) 積極的に授業に参加したか・・・優良
- 3) 授業中に私語を慎んだか・・・優良
- 4) 事前にシラバスを読み、授業に臨んだか・・・改善余地あり
- 5) オフィスアワーを活用したか・・・改善余地あり

- 6) 科目の自己学習時間は一週間平均何時間か・・・一週あたりの学習時間は不十分
 - 7) 総合的に見て自己の学習時間に満足しているか・・・不満とは言えない状況
- 上記の 4) 5) 6) 7) については、検討し改善する必要がある。

備考：

優良：評定 4～5 に該当 改善余地あり：評定 2.5 以下に該当 一週あたりの学習時間：3 時間／週を自主勉強の最少の基準としたい（講義時間は含まない）

2. 教員の授業展開（分析と評価）

- 1) 授業内容は理解できたか
- 2) 科目の主題や到達目標が提示されたか
- 3) 授業構成は順序立ててあったか
- 4) 成績評価の方法について説明があったか
- 5) 学生の理解度を把握しながら進めたか
- 6) シラバスに基づいて授業進行したか
- 7) 授業の工夫（プリント配布など）は適切か
- 8) 時間外でも教員は学習相談にのってくれたか
- 9) 教員の話し方はわかりやすかったか
- 10) 教科書や参考書は役立ったか
- 11) 教員の意欲や情熱を感じたか
- 12) 総合的には、授業に満足したか

（分析と評価）

1) から 12) の項目では、教員の授業展開について、学生からは、おおむね良好（評定 3.5 以上）という評価である。

3. 学生の取り組みおよび教員の授業展開との相互評価

（留意点すべき評価点）

- 1) シラバスを学生は、読んでいない傾向が強いにも係わらず、この評定があるためどちらともいえないという解答が大半を占めている。
- 2) オフィスアワーの活用については、毎年繰り返しの説明と各授業においても活用を促しているが改善されない。
- 3) 学習時間の不十分さも、例年の学生の傾向に見られるとおりである。

（優良な評価点）

各項目を分析すると、教員の熱意を感じている学生が多く、これに呼応して学習意欲が上がることを切望する。教員間で周知し、継続実行する。成績の評価についても具体的客観的な説明がなされており、学生の努力すべき方向性が明確であるといえる。

4. 改善策と対応

(改善策と対応)

例年改善を求められる事項は以下の3点である。

- 1) シラバスを学生は、読んでいない傾向が強いため、各授業にシラバスを持参させ内容についての説明を繰り返す。
- 2) オフィスアワーの活用については、毎年繰り返しの説明と各授業においても活用を促しているが改善されない。学生の主体性を重んじながらも、教員がいつでも門戸を開放していることを繰り返し説明する。
- 3) 学習時間の不十分さも、全体的には多くの学生の傾向に見受けられる。逆転の思考で、授業時間中に必要項目をしっかりと記憶してしまうことを推奨している。当日のキーワードや重要項目を、授業の最初や最後で繰り返し活用することで学習時間の不足を補てんする。

(優良で継続する点)

各項目を分析すると、教員の熱意を感じている学生が多く、これに呼応して学習意欲が上がっているため、教員間で再度周知し、更に学生の学習意欲が向上するように継続実行する。授業の創意工夫をさらに充実させ、学生の自主勉強時間の不足を補てんさせる。

<臨床検査学科>

1. 前年度からの工夫

パワーポイントの利用は主流であるが、より分かりやすいようにイラスト等を盛り込む工夫、またパワーポイントに連動したプリントを配布して、書写の負担を減らし、教員の話に集中できるような工夫がなされていた。一方、教科書の図表をパワーポイントで投影し、教科書そのものに書き込みができ、教科書をベースに復習ができるような工夫もみられた。板書の内容を適切にノートに取っているか、教科書に適切にマーキングしているかななどを、学生の間を回りながらチェックし、説明を加える立体授業を行うなどの工夫も見られた。また既配布のプリントを参考に予め調査等を行い、授業では自分の意見を発表するアクティブ・ラーニングの試みもあった。このように、学生の単純な書写負担を軽減すると同時に、教員の語りかけに集中できる環境づくりが行われていただけでなく、立体授業やアクティブ・ラーニングなど、より学生が主体的に学修する環境づくりに努力が払われていた。

2. 結果

1) 学生の取り組み

学生の出席状況や授業参加の積極性などの学生の評価をみると、前者は4.7、後者は4.5と概ね高評価の結果であったが、オフィスアワーの活用不足(2.4)や自己学習時間の少なさ(2.5)に起因する学生の勉学意欲の低さが散見され、教員の積極的な授業工夫の試みが十分に受け止められていない結果となった。

2) 教員の授業展開

学生の各評価項目については、専門科目、専門基礎科目に関わらず、概ね高い評価を得ており、また授業内容の理解では多くの学生が理解できたと評価(4.0)していた。さらに多くの教科目で教員の指導は適切(4.1)であり、授業意欲や情熱を感じた(4.3)とする評価を得ていた。

しかし、シラバスに基づいた授業展開については、専門基礎科目で若干評価が低かった(3.6)。これらの科目については基礎的な授業内容はほとんど理解できたものの、理解度を上げるために時間をかけることから、授業の進捗に若干の遅れが生じたものと思われる。また授業科目によっては、講義の内容や量が国家試験を意識したために、量的に若干の消化不良が生じたのではないかと考えられる。

3. 次年度への改善点

- 1) 学生からの質疑・相談に関しては、シラバスに公表しているオフィスアワーだけでなく、可能な限り学生の都合も考慮する姿勢をとっていきたい。
- 2) アクティブ・ラーニングの意義を学生に説き、効率的な学習になるように予習課題の図書館を利用した調査や自宅での学習の促進を図っていきたい。
- 3) パワーポイント・プリント・教科書等の有機的な連携にもとづく理解しやすい授業展開を維持しながら、きめ細やかな立体授業等が展開できるように、授業内容のさらなる工夫を図っていきたい。
- 4) 国家試験を意識して授業を行うことは、学生の勉学のモチベーションを高く維持するために必要なことであるが、その前提として学生が消化不良を起こさないことが必須であるので、教授内容を厳選した授業展開を図っていきたい。